藤田保健衛生大学医学部 認知症・高齢診療科

武地 一

(日老医誌 2018; 55: 420-422)

概 要

本部門は2016年4月に立ち上がったとても若い部門です。藤田保健衛生大学は開学が1968年、医学部創立が1972年で、今年開学50周年を迎えます。今年の10月には、50周年を契機に大学の名前も藤田医科大学と変更されます。本大学病院は1,435床と特定機能病院の中で最も大きな病床数を有し、最近、雑誌などにダヴィンチを使ったロボット手術が最も多い病院の一つとして紹介されることもあります。愛知県の中では名古屋市に隣接する東尾張地域に位置し、大学の正門前は名古屋市、敷地は豊明市という形で、まさに名古屋市の周辺に位置します。

立地上、名古屋市で最も人口の多い名古屋市緑区と豊明市を第1の医療圏とし3分の1ぐらいの患者さんはこの範囲から来院されます。残り3分の2は名古屋市の他の区や東尾張、西三河を中心に広い地域から来られます。近隣の名所としては織田信長と今川義元が戦った桶狭間の古戦場があります。

このような地域の中で、高齢者医療や認知症を中心に診療・研究・教育を行う拠点を大学に作ることを目的に当科が設立されました。日本老年医学会の専門医としては救急内科の岩田充永教授、連携地域医療学寄付講座の浅井幹一教授がおられ、内分泌・代謝内科には骨粗鬆症等を専門にされている鈴木敦詞教授もおられます。また、老年医学と強く結びつきリハビリテーション科には才藤栄一教授もおられるなか、それら諸先生方とも協力させていただきつつ、診療科の運営を行っています。

臨床と研究

当科は設立時、教授1名でスタートし、病床は持たず、外来のみの診療で開始しました。認知症看護認定看護師が3名おり、また、リハビリテーション科との連携の中、リハビリテーション部作業療法士や医療科学部作業療法の教官の支援を得て、もの忘れ外来を中心とする外来運営を開始しました。2016年4月から認知症ケア加算のスタートとともに本学にも認知症ケアチームを設置し、認知症・せん妄・フレイル・サルコペニア・嚥下・地域連携などが大きなテーマとなるこのチームの運営を通じて、老年医学的なアプローチを行っています。本大学病院では認知症看護認定看護師の加藤滋代さんを中心に、全国的にも先駆けて院内デイケアを運営してきた実績があり、認知症ケアチームの活動とリンクして活発に活動を行っています。チームのソーシャルワーカーの他、作業療法士、薬剤師も加わり、多職種チームで精力的に取り組んでいます。ただし、認知症ケアチームが直面する課題として、基本的には急性期病院であることから在院日数が短く介入する時間が十分ではないこと、身体合併症の急性期治療を行う中で認知症ケアとの両立が簡単では無いこと、病床数が多くマンパワーが足りないことなど、多くの課題を抱えています。逆に、これらは臨床的にも研究面でもチャレンジを行っていく対象でもあり、工夫を積み重ねています。

認知症ケアチームで院内に対応する一方、外来の患者数は近隣からの紹介を中心に順調に伸び、2017年度からは精神科の松永慎史講師が当科の外来を担当してくれるようになり、2018年4月には、松永講師が診療科としても当科に移ってくれたことで、医局としても漸く教

藤田保健衛生大学医学部認知症・高齢診療科

連絡責任者：武地 一 藤田保健衛生大学医学部認知症・高齢診療科 [〒470-1192 愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪 1-98]

e-mail: takechi@fujita-hu.ac.jp

doi: 10.3143/geriatrics.55.420

医局員集合写真 外来・認知症ケアチームスタッフとともに

授、講師の2名体制となりました。外来には認知症疑いの患者さんが多数来られることから、リハビリテーション部のスタッフの他、放射線科の外山宏教授、乾好貴講師らとともに定例の症例検討会を行い、認知症診断のスキルアップに努めています。

地域との連携

本大学の特徴として、また、高齢者医療の資源として、医療科学部の金田嘉清教授、都築晃講師らを中心に大学としては珍しい地域包括ケア中核センターを持ち、まちかど保健室、訪問看護、居宅介護支援などの機能を有するとともに、高度成長期の団地であるUR豊明団地の高齢化の課題にも取り組みが行われており、本学が立地する豊明市や本医療圏にある東名古屋医師会も地域包括ケアに向けての熱心な取り組みを行っていることから、認知症・高齢診療科ともタイアップして、実践・研究を進

めていく基盤があります。そのような関係性もあり、豊明市認知症初期集中支援チームの活動にもチーム員として加わり、愛知県内で普及している電子連絡帳を用いたバーチャルネットワークも生かしながら、チームの運営にかかわっています。これらの活動を通じて、地域の多職種連携や地域住民を巻き込んだフィールド医学的アプローチも開始しています。

この他、愛知県は、認知症のひとと家族の会が、認知症家族支援プログラムを標準的に動かしているなど、日本でも最近本格的に注目されだした post-diagnostic support を行っていく素地があります。また、名古屋市認知症相談支援センター、愛知県のオレンジタウン構想などの活動もあり、認知症カフェや若年性認知症施策などにおいても、連携をとりつつ活動と研究的取り組みを行っています。

教育と今後に向けて

教育面においても、当科ができたことで2017年度から加齢・高齢者系の講義が始まり、それまで関連の部署でそれぞれに行われていた老年医学の教育を一元的に行えるようになりました。2018年度には研修医向けのプログラムにも参加者が入り、今後は専攻医向けのコース

も設置していく予定です。愛知県には国立長寿医療センター、名古屋大学老年科など全国的にも老年医学の中心的役割を果たしている機関もあり、既に多くの協力も得ていますが、今後は本学からも発信を強め、老年医学の発展に寄与したいと考えています。私たちとともに超高齢社会をリードしていける若手の参加も強く願っています。興味がある方は、遠慮なく連絡を下さい。